

## 戦争の社会病理 日本軍によって処刑された朝鮮人軍夫

麦 倉 哲

### はじめに

国家ぐるみで戦争をする場合にしばしば、総動員と言ったり総力戦と言ったりする。しかし、戦争の場合、みなが等しく戦うのではなく、またみなが等しく命を危険にさらすのではない。総力戦と称して最前線に送られる者たちは、けた違いの死の危険にさらされるのである。また時には、敵との戦闘以外の場面において、軍の統率のため規律のためにと、銃殺や斬殺等、友軍による処刑や虐殺などが行われる。

太平洋戦争下の日本においては、徴用朝鮮人に関する数々の非人道的な処遇が行われた。日本政府は、国家総動員法を制定し、国民を戦争に駆り立てていった。戦況が悪化すると、植民地化した朝鮮半島の住民を徴用する制度を作った。戦争を遂行するために、植民地の住民を強制的に、軍需関連の産業に就かせたり、日本軍のもとで下働きをする要員（軍属）として強制的に働かせたりした。戦時下は、平時を越えた極端な格差が作られる。戦時下であるから、国民の誰しも生命を危険にさらす状況におかれる。しかしだからこそ、上位の者は、自らの命のリスクから逃れるために、生命を奪われる危険の度合いに、明白に極端な格差をつくろうとする。戦時下の最大の格差は、命の格差である。この点の解明なくして、戦争を語ることはできない。戦争で何が起きたか、戦争を災害として、また社会の病理として、命に焦点を当てた解明が尽くされる必要がある。

### 1 渡嘉敷に渡った日本軍兵士と徴用朝鮮人

本稿は、戦争の社会病理のシリーズをなす。（注1）先行の論文で、戦時下における命を格差について論じ、その秩序の中で、有無を言わずに、

沖縄県民が、日本軍人によって処刑させられた事実を明らかにした。ここでは、太平洋戦争下の沖縄県渡嘉敷村における朝鮮人軍夫の死について述べる。特に、戦時下の渡嘉敷島での日本軍人の手によってなされた処刑や斬殺等による殺害について、筆者が過去9年間に実施してきた渡嘉敷村民及び元村民への聴き取り調査の結果から明らかにする。(注2)

焦点は朝鮮人軍夫である。朝鮮人軍夫とは、徴用朝鮮人の一部である。日本帝国の植民地化した朝鮮人を、戦争遂行のために積極的に活用し、活用するどころか自発的意思を越えて強制的に、軍需工場や軍の配下に置いたのが徴用朝鮮人である。朝鮮人軍夫は徴用朝鮮人の一形態であり、徴用された朝鮮人が軍需工場等に置かれれば徴用工であり、軍の参加に置かれれば軍属として朝鮮人軍夫と呼ばれた。

軍要員としての手続きとしては、志願によるものと徴用によるものがあるが、戦況が悪化の一途をたどった1944年以降は、徴用によるものとなった。それ以前の志願とされるものも半ば強制であったり、生活の必然であったりで、自発的な自由意志であるとは当事者には思われなかったであろう。

少額でも手当てが出ていたから自発的とする主張もあるが、本人の意思でなく徴用されたので、強制的に軍に下属する立場に置かれたのが朝鮮人軍夫である。しかも、労働契約も労働基準もなきに等しい戦闘の最中においては、軍隊に下属するのでつねに劣位におかれ、あらゆる生活諸条件において劣悪さを強いられ、また、戦闘が開始されれば、しばしば最も危険な環境に置かれた。

太平洋戦争になって、渡嘉敷島に日本軍が入ったのは、1944年9月9日であり、最初に1,000人規模の基地隊(海上挺進基地第3大隊)が入っ

---

(注1) シリーズの先行論文については、「戦争の社会病理：日本兵によって処刑された沖縄県民」(麦倉哲『岩手大学教育学部研究年報』第79巻、109～123頁、2020年)参照。

(注2) 筆者は、2012年1月から渡嘉敷村での聴き取り調査を開始し、2020年3月までに、渡嘉敷村民、元渡嘉敷村民、伊江島住民を対象に、約100名の聴き取り調査を実施している。本論では、各種文献や統計記録のほか、約100人に実施した調査記録を分析した結果を明らかにしたものである。

た。9月20日には、130人の陸軍の海上挺進第3戦隊が入って、沖縄戦に備え、基地建設を開始された。基地隊隊長は鈴木常良大尉、海上挺進基地第3戦隊長が赤松嘉次大尉である。基地隊と海上挺進基地第3戦隊が島に入って間もなくの1944年10月10日、沖縄県は大規模な空襲を受けた。戦況は厳しさを増し、渡嘉敷島での基地構築に従事してきた基地隊は、翌年の1945年2月に沖縄本島へと移動することになり、基地隊内の整備中隊など二百数十人を残して、島を離れるにあたって、その代わりに日本軍は、兵士でもない朝鮮人軍夫を軍属として配置した。

沖本富貴子が『沖縄方面陸軍作戦』により調べたところでは、渡嘉敷島に配置された部隊は、海上挺進第3戦隊及び海上挺進基地第3大隊であった。1945年2月、基地大隊の主力が独立歩兵大隊となって本島に移動して行ったために、その穴埋めとして、渡嘉敷島に水上勤務104中隊の1個小隊が送られたという。（注3）また沖本によると「昭和20年2月10日」に104中隊第1小隊（斎田重雄小隊長）が渡嘉敷島に着いたこと、人数は212人であることがわかったという。（注4）しかし、軍夫を管理する班長から上の位階には日本兵が就いていて、それらを加算して合計すると226名内外の編成であったかもしれず、人数を確定することは難しい。（注5）

戦時下の渡嘉敷村の住民は、人口登録上は1,377人であった（1940年国勢調査人口）ものの、徴兵による島外への派遣や、渡嘉敷島以外の前島の住民も人口には含まれているために、実際は、登録人口よりも相当数少

---

（注3）『沖縄戦記（座間味村渡嘉敷村戦況報告書）』及び『慶良間列島渡嘉敷島の戦闘概要』（渡嘉敷村遺族会、1953年）では、130人となっている。

（注4）「沖縄戦の朝鮮人：数値の検証」『地域研究』（沖本富貴子（21）：45-65、2018-04、沖縄大学地域研究所）及び『戦史叢書 沖縄方面 陸軍作戦』（防衛庁防衛研修所戦史室、朝雲新聞社、1968年）参照。

（注5）「沖縄戦に動員された朝鮮人に関する一考察」（沖本富貴子『地域研究』（20）：29-53 2017年12月、沖縄大学地域研究所）及び「海上挺進第3戦隊戦死資料」（赤松嘉次、1946年1月9日調整、防衛研究所保存）を参照。ただし、本資料では戦隊の人数が合計で94人となっているため、104人に改めた。

（注6）『語り継ぐ めーぎいらま 渡嘉敷村字前島』（中村文雄、2012年）では、戦中から戦後直後の人口について、合計386人（戦中206人、終戦後の海外引揚者180人）としている。戦中の人口のうち、少なくとも206人は、渡嘉敷島の住民ではないのである。

なかったと思われる。(注6)

表1 戦時下の渡嘉敷村（渡嘉敷島）の住民の推移

年 月 日	移動部隊の名称及び 移動や戦没の事由	住民の数の増減
1940年国勢調査による渡嘉敷村民		1,377人(但し、住民の一定数は、渡嘉敷島ではなく前島を住所地とし、また、徴兵により村外の戦地に配置されていた。)
1944年9月9日	陸軍海上挺進基地第3大隊鈴木常良大尉(後に少佐)	+約1,000人(基地隊兵士)
1944年9月20日	戦隊(陸軍・海上挺進基地第3戦隊)赤松嘉次大尉	+130人(戦隊は104名であるが、他も含めて130人とする)
1944年10月10日空襲	米軍による空襲	一空襲・機銃掃射等による戦没者
1944年11月	朝鮮人慰安婦と帳場が配置される	+7人+1人?
1945年2月中旬(完了17日)	基地隊本隊は沖縄本島へ移動	一約760人(基地隊本隊)(海上挺進第3勤務隊161人、海上挺進第3整備隊55人は残る。戦隊104+161+55=320人がこの時点の本土招兵数か?)
1945年2月10日	基地隊本隊の撤退に伴い、朝鮮人軍夫を配置	+226人(212人の軍夫+14人の日本兵)

海上挺進第一戦隊の座間味島には朝鮮人軍夫310人、朝鮮人慰安婦7人、第2戦隊の阿嘉島・慶留間島には朝鮮人軍夫310人、朝鮮人慰安婦7人、そして第3戦隊の置かれた渡嘉敷島には朝鮮人軍夫212人(管理の日本兵を含めて約226人)、朝鮮人慰安婦7人である。軍夫が配置されたのは1945年2月であるが、慰安婦は1944年11月である。朝鮮人慰安婦の移送については、鹿児島から那覇までの船で一緒になった元戦隊兵士の深澤敬次郎の明白な記憶による。(注7) 1945年9月に阿嘉島に就く予定

であった第2戦隊の一部は、鹿児島を出発して那覇へ向かう船舶の性能が悪く、鹿児島で待機となった。ようやく出発する船では、慶良間へ送られる慰安婦たちの一団と一緒にあった。そこため、一団が21人で、各戦隊へ7人ずつ割り当てられることが決まっているのだと知ったのである。朝鮮人軍夫はそれに遅れること3か月後に、慶良間の各戦隊の基地とする島に着いた。

このうち第2戦隊では、2月に朝鮮人軍夫を迎えるにあたって、朝鮮人慰安婦の7人を那覇に返したという。朝鮮人軍夫を迎えるにあたって、同じく朝鮮から来た女性を慰安婦としていることは問題ではないか、忍びないと第2戦隊野田義彦隊長が考えたからではないかと、深澤敬次郎は述懐する。ちなみに阿嘉島では、慰安所は、深澤らなどの下級の士官候補生には無縁で、もっぱらに将校幹部が利用するところであったという。この点も、渡嘉敷島の様子と阿嘉島とでは、おおいに異なるようである。（注8）

それぞれの戦隊で、朝鮮人軍夫はどのような扱いを受けたのであろうか。第2戦隊では31人が死去し、そのうち12人は処刑されていることが証言等によりあきらかになっている。

深澤の経験では、米軍との不可侵協定の後では、野田義彦隊長は、兵隊ではない朝鮮人軍夫は自由に投降してよいことにしたのだという。しかし、主としてそれまでの間、軍が出した命令に従わなかったなどとして、朝鮮人軍夫12人が処刑されていたということを、深澤は戦後の証言の場で初めて知ったという。一兵士として、しかも士官候補生とは名ばかりの末端の兵士でしかなかった深澤は、島全体の動きを知っているわけではなく、目の前の自分の経験したことしかわからなかったということである。

それでも、沖縄本島の屋嘉収容所で、野田義彦隊長に殴りかかる朝鮮人がいたのを目撃したという。朝鮮人軍夫が島で相当にひどい差別的な扱いを受けていたことは歴然であったという。将校たちの横暴は、末端の日本

---

（注7）元海上挺進第2戦隊兵士・深澤敬次郎へのインタビュー調査記録（2018年、2019年記録）。

（注8）元海上挺進第2戦隊兵士・深澤敬次郎へのインタビュー調査記録（2018年、2019年記録）。

兵に対しても歴然とあらわれていて、飢えとの戦いのなかで深澤は、餓死する仲間をたくさん看取ってきた。自分自身もうあと半月戦争が長びけば、餓死していただろうと述懐していた。(注9) 沖縄県渡嘉敷村における、日本軍による朝鮮人軍夫への処刑はどうであったか。2012年から2020年の間に実施した島民への聴き取り調査から明らかにしたい。朝鮮人軍夫がどのような扱いを受け、果ては死に至らしめられたのかは、依然として未解明な部分が多いものの、分かった部分だけでも示したい。

海上戦隊基地第3大隊の主流が那覇に転進してからは、渡嘉敷島の隊長は、赤松嘉次第3戦隊長が就いた。軍の階級では勤務隊の西村市五郎大尉と同等であるものの、戦隊が中心として位置付けられた結果である。その後、渡嘉敷島は、3月23日からの米軍の総攻撃を受ける。爆弾投下、艦砲射撃、機銃掃射、そして27日から渡嘉敷島への上陸作戦が実行された。日本軍は、特攻艇による作戦を断念し、陣地をニシヤマ(北山)へ移動させ、第一の玉砕及び第二の玉砕を経て、米軍は事実上、島を掌握した。

持久戦で戦いを続けるとする赤松隊は、4月に赤松嘉次隊長が「我々軍隊は島に残ったすべての食糧を確保し持久戦の準備を整へ上陸軍と一戦を交えねばならない事態はこの島に住む人々に死を要求している」とする住民に対する家畜屠殺禁止統制令を出し、全食料の軍管理を厳しく通達した。こうした経過の中で6月26日を迎える。(注7)

## 2 朝鮮人軍夫の処刑のケース

### (1) 処刑されたケースは唯一ではない

日本軍による朝鮮人軍夫に対する処刑について、海上挺進第3戦隊陣中日誌において、処刑があったと思わせる唯一の記載があるのは、6月26日に連行された軍夫の件である。3人の朝鮮人軍夫が規律を乱したので処刑されたというものである。具体的には「恩納河原に於いて糧秣を強要し

---

(注9) 元海上挺進第2戦隊兵士・深澤敬次郎へのインタビュー調査記録(2018年、2019年記録)。

た」と記載している。（注 10）朝鮮人軍夫が、みせしめのように虐殺的に処刑された影響は、島の秩序を引き締めるどころか、朝鮮人軍夫の日本兵への忠誠心を失わせる事態へと転じていった。陣中日誌によると、朝鮮人軍夫の処刑は 1 件で、処刑された人数は 3 人だけのように思われる。しかしながら、実際はもっと頻繁に処刑がなされていた様子が住民からの聴き取り調査から明らかとなった。

## （2）2 人処刑のケース

A さんの目撃によると、処刑された朝鮮人軍夫は 2 人で、これは B さんの目撃と同様である。しかし、C さんの目撃によると 4 人であった。陣中日誌の 3 人、A・B さん 2 人、C さん 4 人と、かなり重要な情報がばらばらである。筆者が聴いた当初は、証言者の人数における記憶に違いがあるかとも思ったが、少年の記憶は大人より正しいことがしばしばで、また人数という単純な事実についてはふつうはまちがいがようがない。しかも、証言者は自信をもって人数のことを話しているのである。また、4 人を目撃した C さんによると、目撃した者は自分以外にはいないとはっきり答えている。すると処刑は、2 人の事件も陣中日誌に記された 3 人の事件も、さらに 4 人の事件もそれぞれ個別に起きたと考えるのが妥当である。また、それ以外にもあったかもしれない。そのことを裏付けるのが、D さんの証言に要約される。D さんは、朝鮮人軍夫はたくさんの人が餓死し、また多くの人が処刑されたと話している。

まず、2 人が処刑されたケースについて、A さんと B さんは次のように話している。A さんによると、処刑は、渡嘉敷地区住民避難者が作った避難小屋エリアであるウンナガーラ（恩納河原）付近で実行された。その一部始終を、島の子どもであった A さんはみていた。あまりにも酷い処刑の様子であった。そしてその晩、朝鮮人軍夫の班長が、A 少年の避難小屋に御礼のあいさつに訪れたというのである。

---

（注 10）『海上挺進第三戦隊陣中日誌』（谷本版、1970 年）33 頁。

資料1 Aさんの証言：2014年聴き取り

麦倉「軍夫が処刑された場所と（島の人が処刑された場所は）同じですか」

Aさん「それは違う」

麦倉「違うんですか」

Aさん「軍夫はあの一僕らの目の前であの一」

麦倉「目の前で」

Aさん「ウンナガーラで」

麦倉「ウンナガーラで」

Aさん「軍夫二人はよ。あの一、同僚を連れて来て穴を掘らせて、二人切る二人はさ一。あの一上半身真裸にして後ろ手に縛って。して、同僚を連れて来て穴掘らせて。して、あの一足、両足、こっちに突っ込ませて、後ろ手で上半身裸で切って。切ったらすぐ穴に転ぶようになっているんですよ。して、二人とも、一人は前に切ったのは、あの一あの一座れって言われたから座って、そのまま切られたんだが。二番目ののは、あそこに座らせて同僚が切られるのを見ているでしょう。だから後ろ手に座ってって軍刀上げたら、いや一、また、うぎゃ一って」

麦倉「ああ、そうですか。それはあれですか、軍」

Aさん「その一その一捕虜たち二人を切った晩、あの一あの一」

麦倉「軍夫たちは」

Aさん「朝鮮軍夫の班長がX（班長の姓）と言ったんですよ。僕を非常にかわいがりよったんですよ。小柄の人で、この日本語も全部分かるし。あの一これがあの一この捕虜たちが切られた晩、あの一A（少年Aの名前）、Aと言って呼んでるんですよ、僕のあの一避難小屋の側で。したから、・・・（小屋の近くにいた）巡査が、あの一Aお前呼んでいるよ、出て行ってごらんって言ったから、これはXという軍夫の班長だったんですよ。Xと言って小柄な人だったんですが、これがあの一あの一僕らは、切られた晩ですよ、僕らは今日かぎりここにはいない、いないからこの毛布をあんた使いなさいと言って」

麦倉「ああ、そうですか」



Aさん「全部、同僚の毛布を全部集めて、あの時は3月（筆者注：実際は3月よりも後と思われる）だからブルブルブルブル、何もないんですからね。着る物も何もない。非常に助かりました、この毛布で」

麦倉「で、もう日本軍の下でえー働く、というのか勤めるのを見限って、もう捕虜になってもいいという覚悟で投降したということですね。なるほどね。それはその原因は民家に行って物を取ったとかそういうふうなかどでしたかね」

Aさん「あの一、あ」

麦倉「朝鮮人軍夫が処刑された原因はどのような規則違反」

Aさん「昼は作業にも何も行かない、病気だと言って、作業にも行かないで、夜は民家のところに忍び込んで泥棒、食い物泥棒をしているということとで切られているわけです」

麦倉「でもまあみんなひもじくて、それは何か物をとってでも食べたいような状況ではあったわけですね」

Aさん「そうです」

まだ少年であるAさんにお礼を述べ、愛用の毛布を差し上げている。お礼を述べた班長は日本兵であると思われるため毛布という多少なりとも上等なものを持っていたのであり、班の軍夫を代表して島の人にお世話になった御礼を述べたものである。

Aさんの話と、次のBさんの話は似ていて、同じ事件のことを述べていると思われる。Bさんは、処刑された朝鮮人軍夫が埋められた場所をその後も覚えていて、終戦から3年後に遺骨を掘り起こし、海に近い自分の家の墓地の後方に埋葬したということ話を話した。そして、2014年の1月筆者はBさんと一緒にその場所に行き、埋葬したという場所に手を合わせた。

## 資料2 Bさんの証言：2012年聴き取り

麦倉「そして、ある時に、まあ、ひもじくて、島民のものを食べて、えー、民家に入って、何かを、えー」

Bさん「そうですね」

麦倉「取ろうとして。そのことを知られて」

Bさん「色々密告されてですね」

麦倉「密告されて、処罰された」

Bさん「ええ」

麦倉「で、虐殺された・・・」

Bさん「とっ捕まえられて」

麦倉「とっ捕まえられて、その場で虐殺された」

Bさん「うん」

麦倉「それはBさんたちが避難していた避難小屋の」

Bさん「すぐ向かい側ですね」

麦倉「すぐ向かい側。そんな時、Bさん、それまでは、あの一、軍ていうのは、  
みんなを守ってくれるものだったけれども、(朝鮮人軍夫が) ちょっ  
と気の毒と思った」

Bさん「それで、部下が、えー」

麦倉「あ、部下が処罰された」

Bさん「えー、部下があれされたもんだから。この晩に、すぐ。山から下  
りてですね。アメリカのところに逃げて来てるんですよ」

・・・

Bさん「気の毒だったですよ」

麦倉「気の毒？」

Bさん「やっぱり、殺されたところで、もう、自分らで穴も掘らされてで  
すね」

麦倉「あ、自分らで穴掘って」

Bさん「ああ。自分らで穴掘らされて。そこに、首を切られ、はねられた  
ら、そこに入り込むようにさ、仕掛けて」

麦倉「うん」

Bさん「そういうのこの目の前で見たもんだから」

麦倉「もしかして」

Bさん「気の毒でたまらなかった」

麦倉「その方が埋められた場所ってのは分かるんですか」

Bさん「はい、分かりよったです」

麦倉「もう、木が、草木がボウボウになって。けども、だいたい、この辺だと分かるんですか」

Bさん「はい」

麦倉「もしかしたら、そこに、眠っているかもしれないんですか、今でも」

Bさん「いや」

麦倉「その後、発掘されましたか」

Bさん「あれは、あ、掘って、取ったんですからね」

麦倉「うん」

Bさん「村民が合同で、あの一」

．．．

麦倉「昭和 20 年の」

Bさん「そうですね」

麦倉「3 年後ぐらい．．．」

### （3）4 人処刑のケース

Cさんが目撃した事件は処刑されたのが4名だったことと、自分以外他に見ていた者はいないと答えていることから他のケースと異なる。このケースは6月26日よりも後ではないか。もしかしたら7月4日であると考えられる。

たくさん処刑されたケースは伊江村民のケースかもしれないと思いこんでいたCさんであるが、そう思い込んだのは、私が聴き取りをするしばらく前に、伊江島の犠牲者のことについて、Cさんは取材を受けていて、その結果、伊江島住民の処刑のことと、朝鮮人軍夫のケースを混同したのではないかと筆者は推測する。伊江島の犠牲者は、男女含めて6人であるが、Cさんが目撃したのは男性4人ということなので、朝鮮人軍夫が処刑されたケースと思われる。また、軍が位置づけた公式の処刑地は、現在の靑少

年交流の家の敷地の塀付近であるが、Cさんが目撃したのは、朝鮮人軍夫4人が朝鮮人軍夫の宿営地に近い場所で処刑されている。その場所は住民の多くが避難小屋を作って寝泊りしているウンナガーラの近くなので、Cさんが目撃することとなったと思われる。

島の人や、伊江島の人処刑される時には、軍の処刑場で実行される一方で、朝鮮人軍夫の処刑は、朝鮮人軍夫の宿営地の近くでなされている様子がうかがえる。こうした処刑のもつ意味は、朝鮮人軍夫に対して、さらには島の住民に対して、見せしめの意味が込められていたのではないかと思われる、明確に差別的な扱いがあったことは否定できない。

戦争体験者の多くが70歳代から80歳代へと移行していくのが2010年代の状況であった。それゆえ証言者は、戦争当時、10代から20歳前後の少年少女である。しかし、10歳代半ばから前半の青少年あるいは子どもであったからこそ、処刑の現場を目撃し何が起こるかをつぶさに凝視していたとも考えられる。年配者や大人であれば、何が起こるかを想像でき、日本兵の行動に視線を投ずることすら恐ろしくて、その場から離れ、あるいは目をそらしたであろう。そうしたことを考えると、当時の子どもの証言は貴重である。子どもたちは、穴を掘っている（掘らされている）ことの異様に興味をもち視線を引き寄せられ、その後起こったことを、生涯忘れえない人生史の中の一場面としてずっと記憶しているのである。4人の処刑についてCさんは、次のように語っている。Cさんは、7月4日に連行された4人の朝鮮人軍夫が処刑される様子を目撃したのではないと思われるのである。

### 資料3 Cさんの証言：2018年聴き取り

Cさん「ア拉里…ウンナガーラにも出て行った後で茅葺で作られた小屋に戻ると、その時に伊江島の人なのかどこのひとなのか4人くらい捕虜がおりて来なさいと言われて、捕まって、自分たちで穴掘って、目の前ですよ。すぐ目の前に」

麦倉「穴を掘らされているのを見たの？」

Cさん「見ました、確実に見ました。掘って掘るの4名並んで掘って、座って。あの時は兵隊が殺した。殺してからこの穴に。こうしてひっくり返るのまで見ました。伊江島の人なのかまたどこの人なのかわかんないですけど」

麦倉「えーとね伊江島の人が処刑されるの見たっていう人と朝鮮人の軍夫が捕まって処刑されたっていうのとあるんですけど。とにかく伊江島の人の場合だと男女です、女性も入ってます。朝鮮人軍夫だと体格のいい男性ばかりです。どっち？」

Cさん「男の人ばかりだったと。どっかに移動してるところの空いてるところに」

麦倉「じゃあ朝鮮人軍夫だったかもしれません。男性ばかり。自分で穴を掘らされてそして斬られて」

Cさん「自分で穴掘って座らせてひっくりかえるのまでは確実にみました。子どもながらになにも怖くなかったですよ」

麦倉「自分たちが住んでいる家の近くだったのね？」

Cさん「そうです。自分だけがこっちに住んでいたらすぐ目の前に穴掘らせてですね」

麦倉「日本兵は何人ぐらい？処刑する側の日本兵」

Cさん「4人でしたよ」

麦倉「それは他の島の人たちや子どもたちも見てたの？」

Cさん「見てないです」

...

麦倉「見てたら処刑された」

Cさん「子どもながらに穴掘ってなにするのかねって。殺していたんですよ。怖いと思わなかったんですよ、まだ子どもだから。穴掘って終わりましたからそこに座らして」

このケースは、6月30日に起きた曾根一等兵の投降事件と関係があるのではないか。この事件は、曾根一等兵が朝鮮人軍夫と朝鮮人慰安婦ら

20 数名とともに米軍に投降した一件である。その経緯について戦後、川田文子は曾根元一等兵へのインタビューをもとに明らかにしている。朝鮮人慰安婦 2 人に朝鮮人軍夫の軍服を着せ、阿波連の炊事班に従事した朝鮮人軍夫ら約 20 人が、複郭陣地の見張りをかいくぐって投降したのである。(注 11) 川田の考察によると、曾根一等兵は炊事を担当し、その炊事担当の中には、炊事の腕が立つ朝鮮人軍夫もいた。炊事班であることで、1 班、2 班、3 班を行き来し、本部にも出入りし隊長の信頼もかちえていた。そのうえ、朝鮮人慰安婦も含むグループで監視を通過して投降できたのである。

### 3 朝鮮人軍夫の処刑の事件を整理する

以下の、当時の女子青年の証言は、曾根一等兵の投降のケースにある背景を物語るものである。D さんは女子青年団員で、やはり炊事を担当していたので炊事班の兵士や朝鮮人軍夫の様子を知っていたと思われる。そうした中で、朝鮮人軍夫に対する残虐な仕打ちを心苦しく目撃していた。ある時に、炊事の作業でやけどした朝鮮人軍夫に対して、痛む傷口をピンセットでわざとつつく衛生兵がいた。治療に名を借りた虐待じみた処遇をたびたび目の当たりにしていたのである。こうしたことから、朝鮮人軍夫が処刑されたことや、山を下りて投降したことなどの様子を、各方面の情報から知っていたと思われる。

#### 資料 4 D さんの証言 1 : 2017 ~ 2018 年聴き取り

D さん「日本の兵隊さ、今さ、朝鮮人がさ、軍夫といってこっちにきていた兵隊と一緒に。したからさ、日本の兵隊はね、軍夫ばかし使ってさ、防空壕掘るのも軍夫、また防空壕の坑木入れないと崩れるさね、坑木運ぶのも軍夫、日本の兵隊は何もしないでさ。この兵隊の飯が 60 キロの

---

(注 11) 川田文子『赤瓦の家』筑摩書房、1987 年。川田文子「刻銘なき犠牲 沖縄にみる軍隊と性暴力第二回住民虐殺」『世界』2015 年 10 月号、274-285 頁。

玄米が来よった。この玄米がね、渡嘉敷の港に船が来たら、この 60 キロの玄米の袋が来たら、渡嘉敷の女子青年が船から運び出して倉庫に持ってきよった」

Dさん「那覇から持って来たら港から倉庫に入れるのは渡嘉敷の女子青年が（やった）。だからこの兵隊はさ、大和んちゅの兵隊はね、渡嘉敷の女子青年隊はね奴隷みたいと言いよった。だから 60 キロの俵を頭に載せて倉庫に運んでよ港から。して軍夫もこんなして、あのね私、作業にいったさ、1 中隊、2 中隊、3 中隊といって、整備中隊といってあったわけさ。ほとんどが整備中隊はね、米なんか臼にいれて玄米は臼でついたら白米になるでしょ、日本の兵隊はね、この玄米を女子青年につつかせて、白米にして自分たちは赤飯炊いて、赤飯と白米食べて、……。自分の考えよ、軍夫は（投降して）100 名位帰って行ってさ 20 名くらい生き残っていったるよ。みんな斬られて餓死して死んでるよ」

Dさん「軍夫と言う人がさ、整備中隊の炊事班にいるわけさ、私もこの炊事班に行っていた。やらされてた、これ」

Dさん「私も炊事班にやらされて、朝集合するでしょ、誰々は 1 中隊に行きなさい、誰々は 2 中隊に・・・って分配されるといって。今の渡嘉志久のキャンプ場あるでしょ、あっちに整備中隊あったよ、あっちにやらされたからね、この衛生兵のね、炊事場でお湯でやけどしたからにさ、医務室に治療しにきてるわけさ。水ぶくれになって腫れて。この日本の衛生兵がねピンセットでさ、痛いさね。痛いからこんなしたら、こんなするんならね、わざとまた、そのぐらいも痛いのかといって、わざとまたつつくからさ」

かくして、推定で、少なくとも約 10 名は処刑されている。これ以外に、敵攻撃によって死亡したり、栄養失調で亡くなったりした者も少なくない。敵攻撃ならば仕方ないという見方もあるかもしれない。しかし、軍において下位の地位にある者ほど、危険を伴う作業を命じられることもしばしばである。一例をあげれば、米軍の上陸作戦を目前にして、部隊の本体は、

山間部へ移動する。ニシヤマ（北山）方面の山影の谷地である。

それまで特攻用の舟艇を格納する壕を掘り、舟艇の上げ下ろしをしていた朝鮮人軍夫は、本部が移動すると、今度は急きょ日夜を分かたず、新しい陣地の壕掘りを命じられる。米軍が上陸作戦を展開し始めた時に、ニシヤマ（北山）の隠れ家のような洞窟はまだ掘り進んでいる最中であった。また、陣地を山間部の頂上付近に移設したために、港に近い食料倉庫に備蓄していた食料を山まで運び込まなければならなかった。しかし、この倉庫は、日本軍にとっては生命線であるため、米軍にとっては格好の最重要の攻撃対象となる。実際、米軍は日本軍の貯蔵庫がどこにあるかを攻撃に入る前にすでに掌握していて、倉庫はみな爆撃を受けているのである。こうした危険な任務に就かされたのが、朝鮮人軍夫及び日本兵の中でも下位に置かれた者たちである。端的に言えば、隊長や将校たち幹部からみて、気に入らないかあるいは他に特に重要なメリットがないと断定された者は、食料の運搬を命じられているのである（このことは別の機会に述べる）。

熱心に戦争に協力した女子青年が従事した重要な仕事は、壕掘り関係では朝鮮人軍夫が掘った土を運んだり、舟艇を隠すための草を刈ることなどである。また食料・炊事関係では、玄米を精米することである。米軍の上陸作戦により、港の機材が壊されたため、玄米を一升瓶に入れて棒を押し込んで精米するという果てしない労苦が日常となった。しかし、そうしてできた白米を食べるのは日本兵である。朝鮮人軍夫は、精米していない玄米の中に、量を増すためにアダンをきざんで入れたものを食べさせられた。それが気の毒だというのが、女子青年Dさんの証言の中にある。「せめて、芋の葉っぱでもください」と頼まれたDさんは、友軍（日本軍）にみられないように、こっそりあげるくらいこことしかできなかった。目撃されれば、朝鮮人軍夫がどのような処罰を受けるかわかっていたからである。当時の玄米は本土から運び込まれたが、長期の運搬期間、湿気の多い倉庫で貯蔵されたものであるため、精米しないと食べられない状態であったと思われる。玄米で食べるのが健康によくないのは、カビが生えているかもしれない状態の米だからである。それゆえ、玄米を食べると下痢をするとい



うのが当時の話になっている。食料の面でもまた極端な差別をうけ下痢を繰り返した結果、朝鮮人軍夫の栄養失調や餓死が多かったのではないかと思われる。

#### 資料5 Dさんの証言2：2017～2018年聴き取り

Dさん「今私考えたら、日本の兵隊は楽しんで、軍夫と言ってさ、朝鮮人と  
言ったわけさ。軍夫、軍夫と、朝鮮人が来てからにさ、これたちが坑木  
なんか壕も掘らせて、壕の下にあてる坑木もこれたちが2人、3人ずつ  
担いでさ。松の木を“ハイヤッチャー ハイヤー ハイヤー”と掛け声  
して運んで歩く。私はまたあの時、白米といっても、女子青年で軍作業  
に行ってるわけさ。私は整備中隊のね炊事に行っていた。米なんかを白  
米に（する）、渡嘉志久のキャンプ場があるでしょ、あっちにあの整備  
中隊といってあった。あっちにいったらさ、私もカゴにいっぱい芋もっ  
て行きよったからさ。そしたら軍夫がきて、“娘さん、芋の皮でもいい  
からください”というわけさ。かわいそうに、芋の皮がほしいねーって  
芋あげるにも友軍に見られたら大変だから見ないうちにさ、芋とらして、  
“早く帰れ、友軍が見たら大変だよ”っといってよ。あの朝鮮人の軍夫  
は飢え死にするとかまた首斬られて、……ちょっとでも悪い事したらさ  
すぐ首（を斬られる）。この埋める穴でもさこの軍夫に掘らせて、ただ…  
ほんとによ、話もできない残酷なことしてる。だから私は、北朝鮮とい  
うのはこの朝鮮人がきたところかね、あれ見た場合（北朝鮮がミサイル  
発射したというニュースをテレビで見た時）、あの（戦争の時の）恨み  
じゃないかねと思うくらい。ほんとにかわいそうだったよ。兵隊の米が  
来るわけさ、この米もさ今は棧橋があるさね、ポートから60キロ入り  
の俵の玄米、島の女子青年隊これが倉庫に運び込んで担いでよ頭に載せ  
て。したから日本の兵隊は女子青年にさ臼であれして（精米させて）食  
べて、この軍夫は玄米にソテツ入れて」

そのような様子の全体を見渡し、Eさんの証言がでてくる。戦中のあの

時、朝鮮人軍夫に対して残虐な扱いをしたことが、その後天罰になってかえってくるのではないかと危惧しているのである。

#### 資料6 Eさんの証言：2017～2018年聴き取り

Eさん「・・・北朝鮮が今頃になってあんなことするのは、日本兵が毎日軍夫は殺されよったんですよ。罰であるはずですよ。」

2010年代の北朝鮮のミサイル発射実験が、日本国民に与える脅威について、多くの日本国民は、北朝鮮の脅威と感じ、危険な動きとして反感をもっている、マスコミの論調がおおかたはそうした視点で報道している。しかしながら、渡嘉敷村の戦争体験者の高齢女性からは、それとはまた違った見方があることが浮かび上がってくる。太平洋戦争中に、朝鮮人軍夫に対する扱いがひどいうえに、処刑された人たちもいるので、そうしたことへの反発や日本への罰が、北朝鮮の危うい状態を引き起こしているのではないかと思えるのである。戦争中、あのような非人間的な扱いをしてこなかったならば、島の高齢者の見方は違ったのではないかと思われるのである。

以上の証言から、陣中日誌に記された6月26日の3人の朝鮮人軍夫の処刑のほか、前後関係は確定できないが、2名の処刑、そして、7月4日に連行された4名の処刑と思われる事件も、島の青少年に目撃されていたのである。戦後70年前後からの聴き取りであるため、目撃者が亡くなっている事件や、また目撃されていない事件もあるかもしれないことを考えると、少なくとも10人以上の朝鮮人軍夫は処刑され、また他方で栄養失調等により戦病死をしたか、もしくは事実上の餓死をしたとみられるのである。

炊事班を手伝ったDさんの計算によると、100人くらいが逃げて投降し、また20人くらいは終戦まで生き残ったという。このことから計算すると、「 $212 \text{ 人} - 100 \text{ 人} - 20 \text{ 人} = 92 \text{ 人}$ 」ということで、92人くらいの朝鮮人

---

(注11) 川田文子『赤瓦の家』筑摩書房、1987年。

軍夫は島で処刑され、次にみるように斬殺され、また、餓死等で戦病死したのではないかと推察される。（注 11）

またその一方で、朝鮮人軍夫を投降へと導き、結果として命を救ったのは曾根一等兵だけではなかったということがわかる。Aさんが懇意にしていた班長（日本兵と思われる）の例もあり、ほかにもあったかもしれない。他方で、以上のほか、蓮下隊による阿波連での処刑、曾根一等兵が捕虜となった収容所で目撃した斎田少尉による処刑のケース（米軍によって尋問を受けていた事案）などが、川田文子によって明らかにされている。

最後に示すケースは、筆者が最初に話をうかがった時に、耳を疑うような衝撃を受けたケースである。これは処刑というよりも、斬殺なのだろうか。この事件を目撃した島の人は、この死を忘れることなく、今も供養を続けている。

## 4 朝鮮人軍夫斬殺のケース

### （1）阿波連2少年の処刑

1945年3月28日の集団自決の後で、米兵の捕虜になった2少年は、米軍により阿波連地区の民家へ戻されたものの、日本軍により、米軍と通じるスパイとの理由で処刑された。しかし、同様に、米軍の扱いで島に戻された10数人は、処刑されなかった。その中には、小学校学齢期の子どもも含まれていた。米軍の捕虜の身であることを考えれば、捕虜となっていない島の他の住民と接触したり、米軍が定めた家屋から離れたりすることも危険である。捕虜収容の家屋は元々阿波連の住民の家屋の一部であり、島の者と交流をするなどといっても無理である。捕虜の安全を確保することは、いったんは捕虜とした米軍が責任を果たすべきところであったはずである。しかし、米兵は、捕虜の安全を保障せず、日本軍がその処置に苦慮する状態をつくったといえる。

2人の少年を処刑したならば、残りの捕虜も全員処刑するのか、将校たちのなかではそういう意見も出たらしい。こうした様子は、島民である防衛隊幹部にも伝わったとみられる。この様子は、8月に軍の本隊とともに

下山し投降した防衛隊の幹部からきいたという当時の青年の証言をもとにしている。(注 12)

阿波連の捕虜たちを皆殺しにするという謀議が持ち上がった時に、防衛隊の幹部は、島の防衛隊の幹部たちと話し合った。もしそうしたことを日本軍が実行するのであれば、もうこれ以上黙ってはられない。赤松嘉次隊長をやるしかない。そういう義憤にかられたという。本土兵の幹部たちは、防衛隊のそうした様子を暗に察知し、捕虜の皆殺しを結局は実行しなかったであろう。しかしながらそれ以後、赤松隊長は、ピストルを常に肌身離さず携行していたという。おそらくは、自分が信頼する、自分を決して裏切らない将校たちと、身の回りの生活の世話をするために徴用された朝鮮人慰安婦を身近に置き、隊長の壕からは極力出なかった。自分に反旗を翻しそうにない者を身の回りに置いたのだとみられる。

その当時まだ国民学校の児童であったGさんは、阿波連地区の捕虜の屋敷の周辺で遊んでいた。米軍の管理下とはいえ、米兵が常駐するわけではない。それゆえ、日本兵も、米軍の捕虜収容施設として利用された島民の家のある集落周辺に出入りしていた。(注 13)

このような状態は、捕虜の身になって考えてみれば、次のようである。米軍の捕虜になっているので一部の逸脱した米兵による人権蹂躪の危険にさらされる日常があり、また他方で、米軍が離れた時には、日本兵が出入りしてにらみをきかせているという状況である。スパイとみなされれば、いつ突然に処刑されるかもわからない鬼気迫る状況といつてよい。そうした中であって、戦時下となった南洋から引き揚げてくる前は、南洋の島で現地の子どもたちと一緒に野山をかけめぐっていた少年は、この閉塞的な状況の中にも、何かの楽しみを見出そうとしていた。

## (1) 山羊狩りと斬殺と

ある日、日本兵数人が、阿波連の集落に近い野原で、山羊狩りをしてい

---

(注 12) 渡嘉敷村元住民男性(昭和3年生)への聴き取り調査(2017年、2019年)による。

(注 13) 本節の内容は、Gさんへの聴き取り調査(2017年～2020年)結果による。

た。そのグループ内には、ただひとり朝鮮人軍夫も混じっていた。島の食糧難は深刻で、この状態は日本兵にとっても同様であった。6月、7月にいたると、陣中日誌においても、兵士が傷病で亡くなっているという記録が目立ってきた。病気と言っても、餓死が多いのである。

兵士たちの山羊狩りの様子は、G少年にとっては面白そうなので、山羊狩りに加わった。日本兵が山羊を追い立て、最後に朝鮮人軍夫が、それを捕まえるのである。しかし、その捕まえる瞬間に、朝鮮人軍夫は山羊を捕まえきれず、逃してしまった。すると、日本兵の形相が一変し、朝鮮人軍夫を激しく叱責した。

その様子を少し離れたところから見ていた少年に対して日本兵は、「おにいちゃん、あっちに行ってろ」と命じた。ここで逆らってはいけないと思った少年は、その場を立ち去った。騒動の様子が見えないところまで急いで立ち去った。叱責する声はひびき、物音もした。そのことがあってしばらくして、日本兵が去った後に、少年はさっきの現場におそろおそろ戻ってみた。

するとさっきの現場あたりに、掘り返し、埋め戻したような跡があった。少し掘ってみると、そこには殺害された遺体が埋められていたのである。戦争が終わってからG少年は、島の集落の人にそのことを伝え、掘り返した。遺骨が収集されたのである。遺体が埋められていた場所を覚えておいたGさんは、後に祠をたてた。

ところで、日本兵はなぜ、山羊狩りのために一人だけ朝鮮人軍夫を加えたのか。そしてなぜ、山羊を取り押さえられなかっただけのことで、朝鮮人軍夫を殺害したのであろうか。兵士はみな飢えて、山羊を取り逃がすというヘマをした朝鮮人軍夫への怒りが沸騰し、許しがたかったのだろうか。それで殺害したとするならば、命の格差は激烈で、ちょっとした失態の責で、殺す側と殺される側になってしまうほどに、特に戦時下では著しい命の格差があったということである。この一件は、通常で考えれば「殺人事件」ということである。

別のことも考えられる。最初から、朝鮮人軍夫をこのあたりで殺そうと

計画していたのだろうか。殺してどうしようとしていたのだろうか。その場から立ち去るように命じられたG少年は、殺害の様子とその後の処置の様子をみていないから、その以後のことは不明である。

そしてもう一つ、朝鮮人軍夫はなぜ、山羊を取り逃がしたのであろうか。素早く逃げる山羊を捕まえるほどに、俊敏に動く体力を、もはや持ち合わせていなかったのかもしれない。また、これは筆者の想像であるが、捕まれば食べられてしまう山羊の運命を思った朝鮮人軍夫は、それと自分の身を重ね合わせて、山羊をつかまえる腕の力がにぶったのではなかろうか。山羊の命を不憫に思う気持ちがどこかにあったのではないだろうか。

この朝鮮人軍夫の命と向き合ってきたのは、Gさんである。何かの理由をつけられた処刑として葬られたのでもない、埋もれた戦争の犠牲死がここにあった。筆者もその犠牲死を悼む機会をGさんから与えられた。犠牲となった朝鮮人軍夫の最期の場所を案内してもらい、手を合わせ供養し、忘れてはならない犠牲死として、戦死の歴史に加えたいと思った。

## 5 わかったこと

### (1) 朝鮮人軍夫の処刑は多数回行われた

海上挺進第3戦隊陣中日誌だけを見れば、朝鮮人軍夫の処刑はわずか1回のみ記載されている。しかし、実際はそれで終わりではない。もっと多く処分や事件が起きていたことがわかる。

これまでにわかった事実に、聴き取りで分かった事実を加えると、推察の部分を含めて、表2に整理することができる。

### (2) 処刑の様子は残虐であった

処刑の様子は、事件として処理しようとする当初から、甚だしい差別に基づいており、日本兵であれば処刑されるとは思えない事案について、死刑が執行されているのである。また処刑は、受刑者自らに自分が埋葬される穴を掘らせ、周囲の人々の見せしめになるような形で実行されている。ただし、それゆえに、目撃者が少なくないのである。処刑の前に裸にする

表2 渡嘉敷島における朝鮮人軍夫の処刑及び虐殺

月日 (1945年)	事件内容	人数	目撃証言との関係	事件の補足
時期不明	処刑（それを受けて班長以下が米軍へ投降）	2人	A、Bさんが目撃	事件後、班長が朝鮮人軍夫を連れて投降したと思われる。曾根一等兵とは別。
6月26日	処刑	3人	陣中日誌に記載	朝鮮人軍夫について処刑と認める。
6月30日	米軍へ投降		Dさんは、投降した人たちの近くで軍作業していたとみられる	陣中日誌に記載。曾根一等兵による投降。
7月4日	処刑	4人	Cさんが処刑を目撃？	陣中日誌4人の身柄確保のみ記載。
阿波連での事件	斬殺	1人	Gさんが目撃	
不詳	蓮下隊による処刑	1人？		
不詳	斎田少尉による処刑	1人？		斎田少尉は班長とみられる。

などの剥奪のうえで、このような公開処刑をしたことは、人道の見地からも、重大な歴史の反省にしなければならず、故人の冥福のためにも、決して忘れずに供養する必要がある。

渡嘉敷島の目撃者は、当時の少年や少女であり、そうした島の人たちは、無念と供養の気持ちを分有し、戦後の長い年月を生きてきたことが、今回の聴き取りで知ることができたことが最大の救いである。

### （3）処刑ではない虐殺のケースもあった

Gさんのケースは、処刑ではなく、斬殺である。しかもその理由が、被害者にとって理解のしようもない、切り捨て御免の状態であることがわか

る。はたしてなぜこのような残忍なことができたのか、歴史的な検証に付されるべきである。

#### (4) 餓死には差別があり、命の格差がある

処刑や斬殺以外にも命は絶たれる。渡嘉敷島の戦闘では、日本兵も数多くが戦病死で亡くなっている。限られた食料の中で、食の分配も、上の者と下の者とは大きな違いがあったとうかがえる。このような命の格差の中で、下位に位置づけられた朝鮮人軍夫は、食料において劣悪な状況に置かれたものと思われる。それゆえ、Dさんが証言するように、多くの軍夫が餓死したのである。ただし、どれほどの朝鮮人軍夫が餓死や栄養失調に伴う病死で犠牲となったかは不明な点が多い。

徴用者には、手当てが支払われる、それが自発性の理由づけになっていて、そのことが、現実を度外視して、強制的でも、奴隸的でもないとの理由に使われている。徴用をする時の理由の背景にはそうしたことがあったとしても、実際は、半ばあるいはかなり強制的であったろう。しかも、おそらく当初は、手当てが支払われるという前提ではあったと思われるが、戦闘が始まってからは、軍の秩序の中で下に位置づけられた。

徴用された軍属というポジションには、最初から人権的な配慮はなく、軍の末端の労働者であり兵隊ではないということで、戦闘の場から相対的に区別され、戦闘を伴わない位置におかれるのではなく、あくまでも軍の下に位置づけられたと思われる。それゆえ、この後に示されるように、戦争の犠牲者死亡率は、渡嘉敷村においては軍よりも高く、また、集団自決という形で事実上の玉砕を求められたがゆえに多くの犠牲者を出した、渡嘉敷村住民の死亡率とほぼ等しい犠牲率となったと思われる。

#### (5) その一方で、救ったケース

朝鮮人軍夫の窮状を思い、一緒に投降することで、結果として、朝鮮人軍夫や朝鮮人慰安婦の命を救ったケースが注目される。集団投降という形で救済した日本兵は、軍の組織を離脱することで、軍夫と自分自身の命を



救おうとしたものである。

これまでに明らかになったのは、曾根一等兵のグループであるが、それ以外にも、集団で投降したケースと思われるものがあったと思われる。朝鮮人軍夫の班長が班の朝鮮人軍夫らとともに山を下りて投降したケースである。日本兵の中に、このような人道的な対応をとる判断をした者がいることが、過酷な戦時下の状況にあって救いでもある。

#### （６）渡嘉敷島で戦死した朝鮮人軍夫の死亡率の推定

沖縄県が建立した平和の礎刻名者のデータベースから計算された住民戦没者比率と比較すると、渡嘉敷村民の犠牲者比率は42.8%である。戦災犠牲者の比率の第一位は西原町で、東風平町、浦添市と続く。渡嘉敷村は8番目の深刻さであるが、沖縄本島以外の市町村では第一である。こうした犠牲者の比率は、東日本大震災で宮城県で最も深刻であった女川町及び岩手県で最も深刻であった大槌町と比べても際立っている。（表3）

表3 住民被災死亡率

##### ■東日本大震災

宮城県女川町	おながわちょう	8,8%
岩手県大槌町	おおつちちょう	8.4%

##### ■沖縄戦被災死亡率

西原町	にしはらちょう	63.7%
東風平町	こちんだちょう	53.3%
浦添市	うらそえし	52.0%
南風原町	はえばるちょう	50.2%
豊見城市	とみぐすくし	49.4%
中城村	なかぐすくそん	43.4%
北中城村	きたなかぐすくそん	
渡嘉敷村	とかしきそん	42.8%

一方、戦時下を生き延びた朝鮮人軍夫は、Dさんの推定によれば、約

100 人が投降し約 20 人が終戦まで生き延びたということから、約 120 人である。差し引きに 92 人くらいの朝鮮人軍夫は、何らかのかたちで命を落としている。朝鮮人軍夫の戦争犠牲者の比率は、配備された朝鮮人軍夫が当初 212 人であることから、表 4 に示した計算により 43.4%となる。朝鮮人軍夫も、住民と同様の高い比率で戦争下の犠牲となったことがうかがえる。

表 4 朝鮮人軍夫の生存者と犠牲者と犠牲者比率（推定）

人数&比率	計 算
生 存 者	投降した人約100人 + 島で生き延びた人約20人 = 120人
犠 牲 者	当初の配置212人 - 約120人 = 約92人
犠牲者比率	92人 ÷ 212人 = 43.4%

#### （7）犠牲者の三者比率の比較からもうかがえる命の格差

朝鮮人軍夫及び住民の犠牲者比率は兵士の比率と比べても高い。阿嘉島の戦いと渡嘉敷島との違いでもある。違うのはそれだけではなく、基地隊兵士と比べて、戦隊の兵士、将校のほうが犠牲者比率は低い。つまり、下位の兵士のほうが犠牲者比率は高い。軍民一体の戦いでは、まっさきに玉砕を命じられる、末端の死者の比率が高くなり、持久戦になれば、監視や斥候など、陣地から遠い、最前線に立つ者ほど犠牲者の比率が高い。そして、飢えとの戦いになれば、食料を蓄蔵し分配する権限の高い者ほど飢えで死ぬことはないのである。

8 月 23 日、沖縄戦の組織的戦闘が終結したとされる 6 月 23 日から 2 ヶ月遅れて、また天皇の玉音放送から 1 週間以上経過して、赤松嘉次隊長以下、渡嘉敷の日本兵は、渡嘉敷のニシヤマ（北山）の陣地から下りて、降伏文書に調印した。その様子をみた住民や伊江村からの強制移住者は、かろうじて、棒きれのつえをつき、汚れた衣服で隊列にいた兵士と、戦闘服に着替えた、相対的に血色のよい将校たちとの落差を驚きの目でみた。

戦時下の死は一樣ではない。敵による殺害、戦傷病死、事故死、自死（集

合的な自死)、餓死そして味方による殺害である。太平洋戦争下における戦争において決して無視できないのは、集合的な自死(集団自決、強制集団死)と、餓死と、味方による殺害である。

表5 渡嘉敷住民と朝鮮人軍夫と日本兵の戦死者ならびに犠牲者比率

戦時下の渡嘉敷住民各層	戦死・戦没の事由	犠牲者数と犠牲者比率
イ 渡嘉敷村民／島民 太平洋戦争における島民の死者	島民死者(集団自決、敵の攻撃、戦病死、日本軍による処刑等、及び島外での戦死・戦没による死	513人(島民戦没者2008年渡嘉敷村HP) 住民の犠牲者比率は、42.8%(平和の礎関係資料による)
ロ 朝鮮人軍夫 1945年3月23日米軍攻撃以降の朝鮮人軍夫の死 主に6・7月と推定	①朝鮮人軍夫の処刑・斬殺 ②食料における著しい配給不足による餓死等による戦死 ③敵攻撃による戦死	①10人+?＊ ②不明(住民の証言では多数) ③正確には今回の聞き取りにより推定すれば、212人ー投降数推計100人、一終戦まで生き残った数推計20人により、戦死者は推計92人程度。よって、あくまで推計によるが、軍夫の犠牲者比率は、43.4%である。
ハ 日本兵(本土招兵) 1945年3月23日以降の本土招兵の死	戦死者の中には、多様な死があるが、詳細は今後明らかにする	81人(沖縄県渡嘉敷村資料)による。 $81人 \div 320人 = 25.3\%$ 本土招兵の犠牲者比率は25.3%である。